

お茶大生の原風景

熊谷 圭知

1. 私の原風景

私自身の原風景は、東京都目黒区緑が丘という場所にある。生まれてから小学校4年の終わりまで、ちょうど10年間をそこで過ごした。住居は当時父が勤めていた大学の官舎で、2戸続きの平屋の小さな棟が4つ、それに学生の貸間を兼ねた少し大きな家が1軒あった。敷地は全部合わせても二百坪にも満たないくらいだったが、それぞれの家には文字通り猫の額ほどの庭があり、ぶどう棚が設らえてあった。家々の間には仕切りがなく、近所付き合いも親密だった。貸間のある家には同い年の男の子がいて、学校に入る前は、敷地中を一緒に三輪車で走り回った。

官舎は、広大な校地の西のはずれに位置していた。裏山は松林で、子供の背丈より高い藪で覆われた場所もあった。そこは、小学校の友達とのよい遊び場だった。裏山に続く崖をよじ登り、近くの原っぱでボール遊びをしたり、キャンパスの中を遠征して、セミやトンボ、小エビやザリガニを捕まえたりした。

小学校5年になる時、父の転勤で名古屋に移ることになった。挨拶をすませ、引っ越しの荷物を送り出した夜、家の電気のスイッチを切って外へ出る瞬間の光景を今も覚えている。

名古屋で暮らすことになったのは、4階建の鉄筋コンクリートの市営住宅だった。住居は相変わらず狭かったが、内風呂もあり、トイレも水洗にかわった。しかし名古屋での生活には、どうしても馴染めなかった。「名古屋弁」ができない東京からの転校生は、学校の仲間に入り込めず、いつもどこか疎外された感覚を抱いていた。そのうちに、自ら選んだ孤独であるかのようなポーズを身につけることに慣れていった。

団地の隣には、広大な敷地のよく整備された公園があった。休日には、野球グラウンドで草野球チームが試合をし、花壇や様々な遊具が置かれたあたりは、子供連れの家族で賑っていた。時には

その公園を家族で散歩することもあり、高校の頃は通学路にもなったが、そこはどこかよそよそしい場所のままだった。遠くまで見遙かすことのできるその空間には、何か落ち着かぬ、自分のものにはなりえないような、そんな気分がいつもつきまとっていた。

東京を離れて以来、夢を見るたびに、生まれ育った緑が丘の風景が現われた。登場人物や状況は現在の知人であっても、その背景は生まれ育った官舎の周りの懐かしい風景なのだ。

大学受験の時、地元大学への進学を勧める教師に逆らって、東京の大学を選んだ。その中には、自らの原風景の土地に帰りたいという思いがたしかにあった。大学は東京の西の外れにあったが、緑が丘の地には年に何度か足を運んだ。大学院を出、他の土地に就職してからも、そこは折にふれて訪れる、自分にとっての秘かな聖地だった。

数年前、久しぶりに訪れてみると、生まれ育った家は跡形もなく取り壊され、土がむき出しになっていた。もうずいぶん以前からそこは、周囲の環境の変化とは不釣り合いに、時間が止まったような風景となっていた。もともと狭小な建物はすっかり老朽化した姿をさらし、空き家も目立っていたから、この日が来るのも時間の問題だと感じていた。しかし、情けないくらい小さな敷地を目にして、やはり奇妙な感慨があった。しばらくその場所にほんやりと立ちつくした後、自分の家のあった辺りに落ちていたモルタルのかけらをいくつかポケットに入れた。

2. 原風景への関心と方法

自分自身の原風景について、自らの本質的な保守性を露呈するような、感傷的な前書きを連ねたのは、筆者が「原風景」というものの存在に関心を持つ理由を語りたかったからだ。それは、決して学問的な理由からなどではない。上述したような、自身の原風景をめぐる体験と、それに対する過剰なまでのこだわりが背景となっている。

「原風景」をめぐることは、奥野（1989；原版は1972）の先駆的な業績をはじめとして、いくつものすぐれた考察がある（岩田1992，勝原1979）。奥野は、文学者たちの原風景がその作品に根源的な刻印をなしていることを指摘した上で、東京に生まれ育った自身の原風景を語る。彼の原風景をなすのは、都市に取り残された「自然」としての「原っぱ」である。奥野の洞察は、自らの原っぱへの憧憬から、農耕以前の縄文時代の日本人の深層の原風景にまで飛躍している。しかし、その論理はともかく、都市の子供たちにとっての管理されない空間としての原っぱの重要性という指摘を含め、彼の原風景論は、多くの魅力と示唆に富んでいる。

地理学者による原風景論としては、寺本（1986）、大内（1989；1995）らの論考がある。寺本、大内はいずれも、大学生への原風景調査にもとづきながらその考察を行なっている。

寺本（1986）は、愛知教育大学と愛知大学の学生、計175人を対象として、「私の地理的原風景の発達、もしくは郷土意識の形成」と題したレポートを、夏休みの課題とし、その結果を分析している。そこで寺本は、個人的で主観的な原風景の記述を分類・整理することは困難であるとしつつも、もっとも幼い頃の地理的原風景が、自宅の周辺数十メートルの空間から形成され始めること、小川や用水路に棲息する小動物（小魚・昆虫）や、手近に採集できる草や花などの自然物が幼少年期の遊びとかかわりながら知覚環境の発達に寄与していること、などいくつかの興味深い傾向を指摘している（寺本1986：39）。

大内（1995）は、1987年から、毎年中央大学理工学部の学生を対象として、原風景の調査を続けその傾向の変化を分析している。それによれば、学生の描く原風景から、しだいに川・池や、森・林といった自然的景観が減少し、それに代わって公園・校庭といった人為的な空間がより多く登場するようになってきているという。大内は、さらに合衆国のコロラド州立大学での調査に基づき、アメリカの学生と日本の学生の原風景の比較を試みているが、そこでは前者の回答に、木立が多く現われるとともに、日本の学生に比べ遠景を眺める視線が目立つこと、一方、行動の面では、日本で上位を占める昆虫捕りが、アメリカの学生にお

いては見られないこと、など興味深い事実が指摘されている。

本稿が依拠するものやはり、筆者が勤務するお茶の水女子大学の学生に対する「原風景」についてのアンケートである。まずその資料を得るに至ったいきさつから説明しておこう。

本学では、1996年度から、学部再編にともなって、これまでの哲学科・史学科・地理学科が新たに「人文科学科」として統合された。入学生は2年生の後期に、上記の旧学科を基盤とする3つのコースと、「総合コース」を加えた4つの中から、進学先を選択することになった。人文科学科の発足にともない、学科共通科目としていくつかの授業が新設された。このうち旧地理学科は「自然と人間」・「人間と空間」というタイトルの2つの授業を、それぞれ半期2単位科目として提供することになった。私は、昨年度と今年度、栗原助教授と共同で「人間と空間」の講義を担当し、そこでは、主に風景や風土をめぐる話をしている。その最初に、「風景」への関心を喚起するきっかけをつくる意味で、受講生自身の原風景について書いてもらうことにした。受講生数は、昨年度が約60名、今年度は70名程度である。受講者は、進学コース選択前の人文科学科の1年生が中心だが、地理学科の上級生や、他学科の学生も参加している。

回答に際しては、まず授業中に奥野健男氏の『文学における原風景』の一節をコピーしたものを学生に配布し、その内容を紹介した。しかし、それ以外は、「原風景」とは何かを特に詳しく説明したり、定義したりすることはせず、「自分にとって『原風景』と思えるもの」を記述してもらうように依頼した¹⁾。その場で回答しきれなかった受講生については、数日中に提出してもらった。回答者数は、1996年度が52名、97年が66名、合計118名であった。

本稿の調査が、前述の寺本（1986）、大内（1995）の調査と異なる点として、次のような点が挙げられる。まず、両者が「原風景」を問うにあたって、その時期をあらかじめ限定している——寺本においては幼・小～中学校時代、大内の場合は小学校低学年——のに対し、筆者の場合は、そのような限定を設けていない。これは、原風景というもののありようをできるかぎり幅広く、調

査者の先入観を最小限にして捉えてみたいと考えたからである。

第2に、女子大学という特徴から当然のことながら、回答者がすべて女性であることである。寺本（1986）においては男女比の記載はないが、大内（1995）の場合は、回答者のほとんど（毎年95%以上）が男子学生である。ここから、ただちに女性のもつ原風景と男性の原風景の構図の相違が比較できるわけではない。しかし、これまでの研究が「原風景」の形成にジェンダーによる差異が存在する可能性を看過していたことは、指摘しておかねばならない。

第3に、お茶大生の特色として、地元出身者が少ない点が挙げられる。たとえば、今年度の人文科学科入学生65名について、その出身高校の所在地をみると、東京都内は8名にすぎない。千葉・埼玉・神奈川の近隣3県出身者も合わせてやはり8名であり、残る49名は他府県出身者である。このことは、彼女たちの大部分が、大学入学に際して、その生活の場を移転しているということを意味する。自らの生まれ育った場所や家族と離れて、東京で暮らすという体験は、学生たちに、自らの「原風景」をより強く意識させる契機となったのではないかと想像している。

学生に渡した用紙はB5サイズの白紙1枚であり、自ら字数は限られる。数行というもののから、表裏にわたりびっしり書かれたものまで、長短さまざまだが、おおよそ平均して400字から600字前後というところであろうか。個人の原風景というテーマであり、また「原風景」をあえて明確に定義せず、一切の限定を設けなかったことにもよって、内容はもとより、書き方のスタイルもさまざまであった。寺本（1986：39）が指摘するように、それらを分類することの困難さはいうまでもなく、そもそもこうした性質のデータを分類することの妥当性や意義についてもさまざまな異論がありうるだろう。しかし、ここではあえて試論を提起してみることにしたい。

3. 原風景の時空間

学生の回答から、「原風景」として描かれた場所と、その形成時期について分類し、その結果をまとめたものが第1表である。前述の通り、回答

者数は総計118名であるが、一人で複数の原風景を記述しているものについては、それをすべて列挙したため、回答総数は述べ155例となった。

(1) 原風景の形成期

原風景の形成期については、もっとも幼い頃の記憶を3～4才の頃と想定し、以降、幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校、と時期区分した。ただし小学校については、低学年・高学年のいずれかが明瞭であるものについては、それぞれを区分し、判別できないもの、全体にまたがっているものは単に「小学校」とした。なお「幼少時～高校／現在」と分類した回答の多くは、これまで生まれ育った場所にまつわる風景を、特に時期を特定せず、あるいは継続的に原風景として認識し、記述しているケースである²⁾。

第1表からまず目につくのは、原風景の形成期が、小学校以下の時期に偏っていることである。前述のとおり、このアンケートでは、原風景の形成時期について、あらかじめ特定してはいない。したがって、時期が分散することが予想されたが、実際には、小学校以下の時期に原風景を持つものが82例と過半数を超えている。時期不詳のものうち少なくとも子供時代であることが特定できるもの（19例）を含めると、この割合はさらに高くなる。小学校のうち、時期が特定できるものを比べると、圧倒的に小学校低学年が多い。

これに対し、中学校・高校時代に原風景を持つものはわずか13例と、全体の1割にも満たない。しかし、少数ではあるものの、高校時代の原風景の描写の中には、受験の圧力や、将来への漠然とした不安や迷いを抱えた自己の心象風景が投影された、興味深い回答が見出される³⁾。

奥野（1989：55）は、作家にとってその文学の母胎となる「原風景」が、幼少年期と思春期とに形成されるとし、前者については「生まれてから七・八歳頃までの父母や家の中や遊び場や家族や友達などの環境によって無意識のうちに形成され」、後者は「二十歳前後のもっとも感受性が強い人格形成期に受ける衝撃的な原体験や感銘によってつくられる」と述べている。この奥野の説は、かなりの程度うなずけるものである。学生の回答からも、小学校低学年までの時期がひとつの原風景形成のピークをなすことがうかがえる。奥

第1表 原風景の時空間

時代 場所	3～4 才頃	幼稚園 保育園	小学校		中学校	高校	幼少時 ～中学	幼少時 ～高校 ／現在	不詳 (子供 時代)	時期 不定	合計
			低学年	高学年							
家の中／部屋		2	2		2			3			9
家の周り／庭		3	1		1		1	1			7
家(部屋)から眺 めた風景			2		1			1		2	6
家の近所											
・近隣の風景	1	3	1		3		2	1	1		12
道(通学路)	1	1			5		1	1	1		10
近所の公園	1		2	2				2	1		8
空き地(駐車場 ・資材置き場)	1		2						3		6
隠れ家・秘密基地			2								2
神社		1	1		2			1			5
野原・原っぱ	1		2	1	1			1	1		7
田んぼ		1	1		2	1		4	1		10
畑	1		1								2
丘			2		1						3
木			3		1			1		1	6
藪・林・森			1		1				2		4
池			1				1		1		3
川・小川											
・用水路		3	1		1		1	1	3		10
海								2	1		3
山						1		2		1	4
空				1		2		1			4
学校(屋内)		1			1	3		1			8
学校(校庭)					1						1
町並み・商店街		1	1		1	1	1	2	1	1	10
人工的建造物 ¹⁾	2		1			1	1				5
その他 ²⁾			2			1		1	1		5
場所不定					1				2	2	5
合計	8	16	29	4	25	4	9	8	26	19	155

1) 灯台(2)／病院の屋上／万博公園の「太陽の塔」／新幹線のホーム

2) 駄菓子屋／市営プール／お地蔵さん／踏切／貨物列車／花火大会

野のいう思春期の「原風景」については、大学生である彼女たちにとって、目下形成途上にあるわけだが、上述の高校時代の原風景の回答には、そうした性格が濃厚に表われているように感じる。

(2) 自然的風景

「原風景」が形成された場所としてもっとも多く挙げられたのは、「田んぼ」「木」「藪・林・森」「川」といった「自然的風景」⁴⁾である。

「田んぼ」は、時には幼い頃の思い出の風景であり、あるいは現在に至るまで存在する故郷の風景である。それは眺める場所というよりもむしろ遊び場であり、他の自然的原風景よりも、とりわけ季節感と結びついて語られている⁵⁾。

「木」は、家からいつも眺めていた柿の木であったり⁶⁾、その上に登って基地を作って遊んだ木であったり⁷⁾、子どもたちの間で怖い噂のある栗の木であったりする⁸⁾。「藪・林・森」は、隠れ家的な遊び場ともなる場所である⁹⁾。

「川」や「用水路」といった水にかかわる原風景も多く登場する。それらはやはり、単に眺めるだけの場所というより、その中に入って遊んだ思い出や¹⁰⁾、手を浸した水の感触とともに回想されることが多い¹¹⁾。

現在の学生たちが幼少期を過ごしたのは、1980年代以降のことである。その彼女たちにおいて、まだここまで自然的風景が原風景として登場してくるというのは、正直なところ、いささか驚きだった。そこには、前述したように、お茶大生に東京以外の出身者が多いという事実もいくらか影響しているだろう。しかし、自らの生まれ育った場所以外、たとえば祖父母の家などの周囲の自然的風景の記憶を、原風景としてあげているものが結構多いことから、単に生まれ育った故郷への懐かしさというだけではなく、彼女たちの中に自然的風景への志向性が強く存在しているといっていよう。

回答の中には、はっきりと自らの育った場所の人工的な風景への嫌悪感を語ったものもみられた¹²⁾。また、それまで遊び場としていた川が、河川改修工事によって、子供が近づけない、しかも汚れた川に変わってしまったことへの子供心ながらの憤りを語った回答もあった¹³⁾。彼女たちの多くが原風景としてもつ「自然的風景」は、都市化

の波や農村の激変の中で、かろうじて残された、あるいはすでに失われてしまった風景である。原風景の存在が人間の人格形成に大きな意味を持つとするならば、ここに示されたような自然的風景への志向性の強さという事実は、現代の環境整備のあり方へのひとつの異議申し立て、あるいは「指針」の役割を果たし得るのではないだろうか。

(3) 近隣空間の風景

自然的風景に次いで多く登場するのが、「家の近所／近隣の風景」、通学路を含む「道」・「近所の公園」といった近隣空間である。この中には、人工的風景も自然的風景も共に含まれる¹⁴⁾。「道」は、それ自体が遊び場となる場合もあれば¹⁵⁾、幼稚園や学校へ通う道¹⁶⁾、あるいは父を迎えに母と一緒に歩いた道などとして¹⁷⁾、特別な思いが付随して語られる場合も見られる。

「近所の公園」や「空き地」、あるいは「隠れ家・秘密基地」は、近隣の遊び仲間との多彩な遊びの思い出と結びついている。特に、整備された公園よりも、空き地や資材置き場のような、管理されない、時には立ち入りが禁じられてさえいる空間が、原風景として強い印象とともに語られる事例が多い¹⁸⁾。これは奥野の言う「都市化から疎外された空間」としての「原っぱ」の魅力に通じるものといえるかもしれない。

「神社」は、人工的な空間でありながら、逆に強く「自然」を意識させる場所でもある。寺本(1986)の調査に比べ¹⁹⁾、原風景として「神社」をあげた者の数こそ少なかったが、町の無秩序さと対照させて神社の「閉ざされた世界」としての魅力語る印象的な記述が見られた²⁰⁾。

(4) 家にまつわる風景

「家」そのものやその周囲、また家の中から眺めた風景を原風景とする者も多い。その中で、自らの生まれ育った家での日常の光景を原風景として想起するものが多いのは当然である²¹⁾。しかし、むしろ、日常親しんでいる風景が何らかの形で「異化」された時²²⁾、あるいは「非日常」としてそれを体験した時、その光景が「原風景」として固着するという例が多く見られる。たとえば前述のとおり、夏休みに毎年訪れた母の実家を「原風景」とする回答はたいへん多い²³⁾。また単身赴任

で離れていた父の部屋を訪れた時の印象を原風景として語る者もあった²⁴⁾。

また家を原風景とする場合、そこには家族や親族の存在とそれに対する独特の感情が結びついて語られることが多いのが特徴である²⁵⁾。

こうした屋内空間への志向性を、女性であるがゆえの特徴と判断することには慎重でなければならない。しかし、ほとんどが男子学生である中大生を対象とした大内の調査(1989)によれば、彼らの「小学校低学年のころの記憶に残っている風景」の中には、家や屋内空間は登場してこない。

(5) 人工的風景

学校、および町並みや人工的建造物といった、人為的風景を原風景とする者の数は、相対的に少ない。

奥野(1989:76)は、学校は原風景になり難いと語っているが、学生たちの原風景の中に、学校という空間がまったく登場してこないわけではない。しかし、そこに現れてくるのは、もっぱらクラブ活動の思い出と結びつく部室や体育館、あるいは校庭などである。これに対し、学校の教室から見た風景²⁶⁾が原風景として語られることはあっても、校舎や授業中の教室そのものが懐かしさをもって回想されることはほとんどない。

これに対し、町並みや商店街は、子供時代や思春期の忘れ難い経験と結びつき、情緒的な記憶や鮮烈な感情をともなっており、原風景として語られる事例が多くみられる。それらは、両親が共働きで祖父母の家で多くの時間を過ごした子供時代、祖母に連れられて夕方買い物に行った商店街の「もの淋しい」思いのする風景であったり²⁷⁾、浪人時代寮生活をしていた名古屋から家に帰る時、新幹線の車窓から眺める故郷の街並みであったり²⁸⁾、家庭内の問題が絶えない中で思春期の数年を過ごした街を再訪したときの、胸苦しくなるような切なさを伴う風景であったりする²⁹⁾。

偶然訪ねた上野の古い商店街に、昔育った街を思い出して懐かしさを感じたという回答³⁰⁾、テレビ番組に出てくる昭和30年代ぐらいの風景に、自身の経験はないにもかかわらず「原風景」的な懐かしさを覚えたといった回答³¹⁾もみられる。その一方、近代的で計画的な街並みに愛着を覚えるという回答がきわめて少ない³²⁾のは、興味深い。

(6) 原風景形成の時間と空間

原風景の場所とその時代との関連を見ると、自然的風景が原風景として形成される例は、小学校以下、および「子供時代」・「幼少時～中・高校時代／現在」に多い。また近隣空間に原風景を持つ例も、小学校以下の時期により多くみられる。

一方、中学・高校時代に形成された原風景には学校が多く登場する。逆に、自然的風景がほとんど姿を消すのが特徴である。

自然的風景の中でも、山や海は遠景であることもあってか、幼少期に限った原風景としては登場してこない。田んぼや野原や川のように、子ども時代の遊びと結びついたその風景の内部に身を置いた体験として語られたり、またその風景の変化への感傷が語られたりすることもない。むしろ、長い時間の経過にも変わらずにある風景として、認識され、評価される場合が多い³³⁾。

4. 原風景を構成する要素

「原風景」そのものではなくとも、原風景を描写するにあたって登場してくるさまざまな要素を分類し、列挙してみたのが第2表である。

(1) 自然的要素

原風景に自然的風景が多いのは、すでに述べた通りであるが、それに伴って「原風景」の中にも自然的要素が多く登場する。

中でも頻出するのは、「草花」であり、ほぼ4分の1の回答に何らかの形で登場している。これらは、名もない雑草の生い茂る場所であったり、田んぼに咲くレンゲの花であったり、風に揺れるススキの穂であったり、その具体的記述はさまざまである³⁴⁾。これらは、単に風景として眺められるだけでなく、後に述べるように、「花を摘む」といった行動が向けられる対象でもある。これに次いで多く登場する「樹木」も、やはり眺められる存在であると同時に、登ったり、木の実を拾ったり、といった行動が向けられる対象ともなっている³⁵⁾。

「藪・林・森」を含め、こうした植物への視線は、彼女たちが育った環境の中にそれらが実在したからこそ生まれてきたものではあるが、単にそれにとどまらない。そこには主体の指向性が反映

第2表 「原風景」に登場する要素

自然的要素	出現数 [%]	人工的要素	出現数 [%]	人 物	出現数 [%]
①草花 ¹⁾	30 [25.4]	①道	14 [11.9]	①近所の遊び仲間	30 [25.4]
②樹木 ²⁾	23 [19.5]	②町並み・街の風景	11 [9.3]	②母親	15 [12.7]
③田	20 [16.9]	③公園	9 [7.6]	③学校の友人	14 [11.9]
④昆虫 ³⁾	15 [12.7]	室内	9	④祖母	11 [9.3]
⑤小動物 ⁴⁾	12 [10.2]	⑤学校(教室・校舎 ・体育館)	8 [6.7]	姉妹	11
山	12	⑥空き地	6 [5.1]	⑥兄弟	10 [8.5]
川・小川	12	⑦神社	5 [4.2]	⑦父親	8 [6.7]
⑧空	11 [9.3]	用水路	5	⑧祖父	7 [5.9]
⑨藪・林・森	10 [8.5]	ブランコ	5	⑨家族	6 [5.1]
畑	10	⑧ジャングルジム	4 [3.4]		
⑪夕焼け・夕日	9 [7.6]	汽車・電車	4		
⑫野原・原っぱ	8 [6.8]	コンクリート	4		
⑬木・草の実	7 [5.9]				

1) レンゲ(5)・ススキ(5)・シロツメクサ(3)・芝生(3)・菜の花(2)・ツクシ(2)・クローバー(2), 等

2) どんぐりの木(5)・柿の木(2)・栗の木(2)・桜の木(2)・桃の木(2), 等

3) 蝶(5)・セミ(5)・トンボ(3)・カナブン(2), 等

4) オタマジャクシ(6)・カエル(2)・メダカ(2), 等

されているからである。これを、ベルク(1988)の言うような、日本文化の風土性の現われとみなしうるのは、あるいはさらにそこに女性(女兒)というジェンダーにともなう視点が加わったものであるのかは、興味深い問題だが、残念ながらここではそれらを十分に論じるだけの根拠を持たない。

下位に登場してくる「夕焼け・夕日」は、自然的要素であるばかりでなく、時刻と深くかかわっている。夕暮れという時刻は、日常見慣れた風景が異なる容貌をともなって現前し、それが人間の内面に潜んでいた感情を掻き立てながら、強い印象を持って心に刻まれる時なのだろう³⁶⁾。

(2) 人工的要素

「原風景」における人工的要素の登場は、「自然的」要素に比べ、ずっと少なくなる。その中で原風景の舞台として語られなかった要素として、数は少ないが、「ブランコ」「ジャングルジム」といった遊具、「汽車」や「電車」、「コンクリート」などがある。

公園の遊具については、そこで遊んだという記述があるだけで、特に思い入れをともなって視線の焦点に収められている例はほとんどみられない³⁷⁾。一方、汽車は、ある感情をともなってそれを眺める主体の視線の焦点に存在する³⁸⁾。コンクリートについては、コンクリートだらけの街に育った中で、コンクリートの谷間の公園や校舎が原風景であるという回答が注目される³⁹⁾。

(3) 人物

原風景に登場する人物的要素としてもっとも多いのは、近所の遊び仲間(30例)である。すでに見てきたように、小学校時代までの原風景形成には、この近所の遊び仲間の存在が大きくかかわっている。「公園」や「空き地」・「秘密基地」といった人為的風景はもとより、「田んぼ」や「野原」といった自然的風景が原風景となる上でも、近所の遊び仲間の存在は重要である。斎藤次郎は『放課後の子供たち』(1983)の中で、異年齢を含む近隣の遊び仲間集団の消滅が、都市の子供たちにいかに大きな影響を与えたかを、鮮やかに描い

ている。もし自然的風景が幼少期の原風景から消えていくとすれば、単に物理的環境の消失だけでなく、こうした近所の遊び仲間集団の衰退も作用しているにちがいない。

原風景に登場する肉親の中で、もっとも多いのは母親であり、それに比べ父親の影はやや薄いようだ。姉妹や兄弟は、遊び仲間でもある。日常的に同居している例がほとんど見られない「祖母」が原風景に多く登場するのは、すでに述べた通り、日常を離れて、夏休みなどに訪ねた祖母の家の記憶が、深く印象づけられていることによる⁴⁰⁾。

ちなみに、原風景の中に学校の教師についての言及が登場するのは、わずか2例だけである。それも、ひとつは、学校の先生から禁止されいながら昼休みによく訪ねた公園が原風景となったという例、もうひとつは、教師から死角になった教室の席からの眺めが原風景であるというもので、そこで半年間ほとんど授業を聞かなかったというおまけが付いている。残念ながら、原風景に関するかぎり、教師というのは人間性を持った存在としてではなく、管理・抑圧する存在としてのみ意識されるもののようだ。

5. 原風景にともなう行動と感覚

(1) 原風景にともなう行動

原風景にともなう行動として語られたものを、列举したのが第3表である。

第1位に挙がった「風景を眺める」という行為は、単に風景が視野に入っているというだけではない。もっと積極的なまなざしの焦点として、風景が「眺められ」、それが原風景形成の核をなしているような事例である⁴¹⁾。風景の中に身を置いて行動するのではなく、その外にあって「眺める」という行為が、原風景形成の契機となることが多いという結果からは、ここでもジェンダーによる特質が作用しているのではないかという仮説が想起されるところである。しかし、これについても、もっと詳しい比較検討が必要だろう。

そのほかの行動については、「花を摘む」「花輪を作る」「ままごとをする」といった、「女の子らしい」遊びが挙がる一方で、オタマジャクシなど水性の小動物を捕まえたり、昆虫を採ったり、ボール遊びや野球をしったりといった、より「男の

第3表 原風景に結びつく行動

風景を眺める	17
花を摘む	8
小動物（オタマジャクシ等）を捕える	7
虫捕り	6
花輪づくり	6
木の実拾い	6
ままごと（家族ごっこ・団地ごっこ）	5
基地づくり	5
ボール遊び	4
野球	3
缶けり	3
木登り	3
鬼ごっこ	3
かくれんぼ	3
風揚げ	3
木の実を食べる	3
菓子を食べる	3

子らしい」遊びも混ざっている。ただし、大内（1989：67）の調査で、中大生（男子）の行動が「虫捕り」・「（水生昆虫を含む）魚捕り」・「野球」という3つの遊びに圧倒的に集中しているのに比べれば、お茶大生の場合は、個人によるばらつきが大きい。

(2) 原風景にともなう感覚

風景は、単に視覚によって「眺める」だけのものではない。風景とのかかわりの中で、人はそれを五感によって受け止め、ある感興を抱く。それらは、匂い（嗅覚）であったり、音（聴覚）であったり、肌ざわり（触覚）であったり、あるいは味（味覚）であったりする。学生の回答からも、彼女たちが原風景を五感で感得している様子が生き生きと伝わってくる。

「匂い」については、「（祖父母の家である農家の）日向くさい匂い」や、「草のむっとした匂い」、「（故郷の海の）潮の香り」、「お父さんのコロンの匂い」、「（夜店の）イカやお好み焼が焼ける煙と匂い」、「とんこつの匂いが漂うラーメンの屋台」、「花火大会の火薬の匂い」から「車でつぶされたたくさんのカニの匂い」…。

「音」については、「虫の音」、「神社から聞こえる絶え間のない蟬時雨」、「風鈴の音」、「押し寄

せる波の音」,「夜店の発電機のモーターが回る音」,「お腹の底まで響きわたる(花火の)『ドン』という破裂音」等々。

「触感」については,「汗ばんだ肌に吹く風の心地よさ」や,「30℃くらいの湿度を含んだ空気」や,「(自分ひとりで見つけた川の奥の秘密の場所で)さわった水の冷たさ」,「(捕まえたもんしる蝶の羽根を触った指についた)真っ白なりん粉」など。

「味覚」については,「木いちご」や「グミの実」の味,「フライパンで煎って食べた椎の実」,「すくって飲んだ清水」,「夜店のかき氷の味」,「(古い田舎の家での法事に出た)精進料理のお膳の味」,「(近所の仲間と遊びながら食べた)コアラのマーチやアポロ」…。

これらは,「原風景」の重要な構成要素をなすばかりではなく,同様の感覚を味わった時,その原風景を蘇らせる「きっかけ」(cue)をもなしているといえよう。

6. 原風景にともなう心性: 結びにかえて

本稿では,「原風景」を「個人の心に深く刻みこまれ,繰返しあるいは時折,強い情感をともなって喚起される風景」としてとらえる。そこで重要なのは,ある特定の風景が「原風景」として人の心に刻まれるとき,そしてそれが思い起こされるときに心性の所在である。

原風景についての記述を通読していると,そこにはいくつかの共通の心情が浮かび上がってくるように思う。

ひとつは,家や家族に囲まれ守られているという感覚がもたらす,原初的な「暖かさ」や「安心」の感情である。これは,時間的にはどちらかといえば幼少期,空間的には「家」とそれを取り巻く風景を原風景とする回答に典型的に見られる⁴²⁾。第2に,逆に,大人の束縛を逃れ,自分たちだけの遊びの世界を構築した時の「自由さ」や「解放感」といった気分である。これは,近隣の仲間との遊びの中で現われてくるものであり,成長による行動空間の拡大にともなっている⁴³⁾。

最後に挙げられる,そして最も重要と思われるのは,「寂しさ」や「孤独」・「不安」の感情である。親から離れている寂しさ⁴⁴⁾,形を持たない

漠然とした不安や孤独感⁴⁵⁾,さまざまな苦渋をともなう体験⁴⁶⁾,そして思春期にみられる将来に対する不安⁴⁷⁾に至るまで,こうした感情は,時間と空間を問わず,原風景形成のひとつの底流をなしているように思われる。

「原風景」というものは,けっして単なる懐かしさや幼少期の幸福な記憶によってのみ彩られるものではない。原風景が,こうした「不安感」や「孤独感」をともなったり,あるいはそうした風景が,物理的にあるいは精神的に,もはや手の届かないものになってしまったという「喪失感」と結びついて形成されるものでもあるというのが,今回の「原風景」への考察から導き出されたひとつの示唆である。それはまた,結局のところ,自分自身の原風景へのこだわりに対する解答でもあったかもしれない。

註

1) 学生への問いかけ文は,次のとおりである。「あなたにとっての『原風景』とはどのようなものですか? できるかぎり具体的に(時・場所・風景の具体的描写・それに結びつく記憶など…)記述して下さい」(1996年度)。「あなたにとって『原風景』(と考えるもの)を具体的に語って下さい(時代・場所・行動・感覚等)」(1997年度)。なお,以下の註において引用した学生の回答については,一部地名等を仮名にしたほかは,原則として文字使いも含め,すべて原文のままである。(途中,省略した箇所は,…で示した)。

2) たとえば,次のような回答が典型的である。「私の住んでいたところは城下町で,家のすぐそばに…城がある。そこで私は,小学生の頃,家族や近所の子どもたちとよく遊んだ。その城には“うるし林”と呼ばれる小さな原っぱがあり,その原っぱで,父とキャッチボールをしたり,母とバドミントンをしたり,兄や友達と鬼ごっこや縄とびをしたりして,毎日,日が暮れるまでよく遊んだ。…私が通った中学・高校はその城の周辺にあり,冬になると,そこで体育の授業として マラソンをやらされた。マラソンでその“うるし林”の横を通る度に,いつも幼い頃の思い出がよみがえり,ほんの一瞬だが,そのマラソンの苦しさから解放された気分になった。今でも実家に戻った時は,母といっしょにその城に散

歩に行く。そして“うるし林”の横を通ると、自分の成長の具合と年月の過ぎる速さをしみじみと実感する」(96年度／人文科学科・1年生) [傍線は引用者、以下同じ]。

- 3) 次に挙げる2例は、偶然ではあるが、どちらも高校時代のある一瞬に眺めた「夕暮れの空」が原風景として焼きついているというケースである。

「『原風景』がある特定の個人が持つ、一番心に残っている風景とするのなら、私にとっての原風景は、高3の秋に電車から見た夕焼けではないだろうか。ふだんは受験勉強で遅くまで学校に残っているので真っ暗な中を帰っていたけれど、何かの都合でたまたま夕方早めに帰ることにして、一人で電車に乗った。窓から外を眺めていると、心がしめつけられて、涙が出そうになってきた。平城宮跡が目の前に大きく広がり、その広大な土地が微妙なだいたい色で染められており、なつかしいようなさみしいような妙な気持ちになった。空の色はいかにも秋の夕焼けといった色合いで、がんじがらめだった心のひもが1本1本ほどかれていくような感じだった」(96年度／人文科学科・1年)

「『原風景』というには新しすぎる記憶かもしれないが、『吸いこまれるようなかなしさ、なつかしさで心を揺する』光景として、私は高校の教室の窓から見た夕暮れの空をあげる。高校3年生の2学期は受験勉強と称して毎日6時頃まで学校に残っていた。…たぶん10月後半のことだったと思うが、5時半頃そろそろ帰ろうと思って窓の外を見た。教室があったのは3階で、窓からは狭い中庭をはさんで隣の校舎が見える。空が見えるのはその校舎の上、窓の上3分の1ぐらいだったので、私の心に焼きついている光景というのは、夕暮れの空というより、校舎にはさまれた『空気』ということになるのだと思う。その日は湿気が多くてあまり良い天気ではなかった。だから真っ赤な夕焼けではなく、明るく青かった空が、だんだん群青色になり青紫になり紺色になっていく、そういう夕暮れだった。弾力のある粒子がぎゅっしりと詰まって、空気をつくっているような、何かしらの手ざわり、手ごたえが感じられそうな、きちんと重さをもっていそうな空だった。私はその空、空気に『乗りたい』と思った。『飛びたい』ではなく。たとえば水に浮くように、その空には『乗れ』そんな気がした。そんな質量を感じさせる空だった。…天気あまりよくない日、青紫の夕暮れ

の日は、あの時の空、空気を思い出す。特に高い建物から外を眺めていると、水中に沈んだ都市にいるような気がする。しかし、あの時以来、空に『乗れ』そうだと感じたことはない」(96年度／人文科学科・1年)

- 4) もちろんここで言う「自然」とは、「田んぼ」にしても「野原」にしても、純粋な自然ではなく人為の加わった風景であり、人がそれを自然的なものとして感じるという意味においての、いわば「表象としての自然」である。

- 5) 次の2例はその典型である。

「(私の原風景は)家の前の田んぼ。友達と鬼ごっこ、球技など様々な遊びをしたり、座ってそこから見える風景を眺めたりした。一番故郷、家を感じる場所であり、季節感も感じさせられた。春には土が耕され、初夏には田植えが始まり、私達は遊び場として使えなくなる。秋には収穫され、地面はわらでいっぱいになり、やっと遊ぶことができるようになる。冬は朝霜柱が張り、とんびが集まる。何をしても良い空間であると同時に、自分たちの想像力次第であそびの楽しさが変わっていく所に魅力があった」(97年度／中文科・4年)

「私にとっての『原風景』と思えるものは家の近くの田んぼだと思います。…小学校のころは学校から帰ると近所の友達と、春はレンゲ摘み、初夏にはオタマジャクシ取り、そして正月にはたこあげなどをして遊んでいました。田んぼを通して小学校に行ったり、梅干の種をとばして遊んだりしていました。高校に入ると、さすがに田んぼの中を通して学校に行くことはなかったのですが、田んぼを渡る緑の風や黄金色の風に吹かれて季節を感じていました。どんどんまわりの田んぼが減り、私の田んぼに対する思い入れの強さにやっと気がつきました」(97年度／人文科学科・1年)

- 6) 「私の家の裏には寺があって、…ちょうど渡り廊下になったところに柿の木が植えてあり、それが私の部屋からよく見えた。その柿の木が迎りの風景からくっきり浮かび上がって見えるのがきれいで、いつも見ていた。…去年の春頃柿の木は切られてしまったが、特に東京にいと、夕日をあびてその木が立っている姿が脳裏にうかんで、家が懐かしくなるときがある」(97年度／人文科学科・1年)

- 7) 「幼い頃、といっても小学校2年ぐらいまでの話だが、私と妹は近所に同じぐらいの歳の女の子があ

まりいなかったせいもあり、男の子とよくつるんでいた。特に夏休みになると、朝っぱらから男子が数人で「遊ぼう!」とやって来たものだった。その頃遊んでいた場所で最も印象に残っているのは、私たちが住んでいる社宅の敷地のはじの方にあった「木」である。自転車でそこいらを走りまわってはどこからか板切れなどを見つけてきて、「基地をつくろう!」と木にのぼって枝と枝の間にそれを置き、ひもか何かでくくりつけたりして、皆でそこに座って涼しい風に吹かれたりした。その時の太陽のまぶしさ、鮮やかな緑の葉、夏の青い空、汗ばんだ肌に吹く風の心地よさ——その頃のことを思い出すと、こういったものが感覚として今でもよみがえってくる」(97年度/教育学科・3年)

8)「私にとって『原風景』と思える場所は…(小学生時代の)登下校に通る…栗畑である。栗の木はすでに大木になっていて、中央部にとりわけ幹の太い木がある。この栗の木には、子どもたちの間で噂があり、根元に死体が埋まっているとか、夜中に近くを通ると根元から何本もの手がのびてきてつかまえるようにするといわれていた。でも秋になると栗ができるので、勝手に栗を持ち帰り、母に渡すとゆで栗になって夕飯に出てきた」(97年度/教育学科・3年)

9)「私は物心ついた頃から、ニュータウンのように公園や学校やスーパーマーケットが整備された住宅街に住んでいたので、専ら遊び場はその中の公園であった。…その中でも特に思い出深い遊び場は、公園の裏のやぶとか丘っぱいところで、そこで変な草花や木の実を見つけたり、宝物を隠したり、危ないところを走り抜けたり、ひっそりとおままごとをして未開人の生活のまねをしたりした。なぜかみんな、わざわざ設備を整えてくれたすべり台やジャングルジムで遊ぶことより、草木の生い茂った暗いところで遊ぶことの方が楽しく生き生きとしていたように思う」(97年度/地理学科・3年)

10)「私にとって『原風景』といえるのは、やはり故郷である金沢の、家のすぐ近くを流れる大野川だと思う。歩いて20秒たらずで河原だったから、幼い頃の遊び場といえば川だった。…私が小学校5・6年生くらいになると、川も汚くなっている、手をつけるのも『ばっちい〜』と言われるようになってしまったが、保育園の散歩ではみんなパンツ一枚になって川に入って、メダカを取ったり水をかけあっ

て遊んでいたものだ。中学校に入ると、その川にかかる橋を渡って通学した。うれしいことも悲しいことも心にかかえて、夕日の映える川を見ながら橋を渡って帰った。どの思い出にも大野川の風景がバックにある」(97年度/人文科学科・1年)

11)「私の記憶に妙にはっきり残っているのは、小さな川(子どもが飛び越せるくらい)に沿ってずっと山の中へ入って行くと、水がたまっている場所があって、その水のふちのところを掘ってみるときれいな貝がいっぱい出てくるというものだ。父や祖父に聞いて見ても、家の付近にそんな場所はないし、記憶違いではないかと言われた。でも私は、その時さわった水の冷たさや、貝を見つけた時の感動まで鮮明に覚えている。大人の知らない秘密の場所を知っている自分が、妙に誇らしく思えたものである」(97年度/人間社会学科・2年)

12)ある学生は、自らの原風景は自分が幼い時期を過ごした場所ではないと述べ、次のように語っている。「私の育った場所は、戦後の新興住宅地っぽいところで、古いものはほとんどなく、田んぼがどんどん安っぽい建売住宅に変わっていくというような、嫌悪さえ感じるようなところでした」(97年度/人文科学科・1年)。

彼女の原風景は「青い空、白い雲、緑の木々、石の階段、30℃くらいの湿気を含んだ空気というようなもの」であり、彼女によれば、それは「多分、幼い時に旅行好きの祖父母に連れられていった場所の共通した雰囲気や景色」である。「旅行は夏で、古い寺や、山奥の温泉などによく行」ったという。

13)彼女の語る原風景は次のようなものである。「保育園の時まで家の目の前に流れていた小川。すごく浅くて、大人のくるぶしぐらいまでしか水位がなく、子供が入っても安全だったため、よく子供がたまっていた。川の縁は草が生い茂っていて、川の中にはめだかみたいな魚とざりがにがいっぱいいて、川底はとてもきれいな砂だった。けれど、その後川は補修工事をされ、立ち入り禁止のすごく汚いオレンジ色の川になってしまった。子供は皆怒ってたし、私は悲しかった。この時大人不信になった記憶がある」(96年度/人文科学科・1年)。

14)子供時代に「田んぼ」や「野原」が原風景として形成されるのは、家からそれほど遠く離れた場所ではないことが多いから、この両者は実際には厳密に区別することが難しい。基本的には、回答者の原風

景への視線の焦点がどこに向けられているかによって区分した。「田んぼ」と分類したものの大部分は、註5)に示したように、私の原風景は田んぼであると明言している例である。また次のような回答も、明らかに田んぼが原風景の舞台となっていると解されるので、これに含めた。「私が住んでいたところは、すぐ近くに水田が広がっていて、春には田んぼの水路でよくセリを取った。その水田に対する私のイメージは常に『春』で、暑くもなく寒くもなく、いつも小川がさらさら流れているというものである。セリ取りをよくしたので、何となく土臭い匂いと、汚れた靴を思い出す」(96年度／人文科学科・1年)。

一方、「自分の家の回りの風景」を原風景とし「遠くに見える雪をかぶった立山連峰まで広々と広がる田んぼ、畑、あぜ道、小さく見える遠くの家」という回答については、田や畑は「近隣の風景」という原風景を構成する要素とみなし、それぞれを独立した原風景としては抽出していない。

- 15) 「アスファルトの歩道と土手」が自分の原風景であるという学生は、それを次のように描写している。「県道に沿って一方の歩道が1～1.5kmほど続いていました。周囲は田んぼがほとんど、少々の新興住宅です。…歩道はアスファルトで固められ、わきに用水路(農業用)がコンクリートでつくられていましたが、すぐ横は田んぼの土手で、草だらけの歩道でした。私は毎日この道を往復していたのですが、友達と一緒にときは遊びをし、一人のときは空想遊びや考えごとをして、今の何十倍も密度の濃い通学・帰宅でありました。その道に親しんでいたことには、アスファルトのでこぼこ一つ、ひび一つまで知っていました。この歩道は私にとって“通過するもの”ではなく、(自分が)“そこにいるもの”であつたと思います。友達との遊びも、神社や家や山で遊んだ思い出よりも、歩きながらした遊びの方が思い出されます。そして道を歩くことは私にとって、場と場との“間”ではなく、それ自体一つの場であるようです」(96年度／人文科学科・1年)

- 16) 「幼稚園に行くために通った道に特別な感情を持っている」という学生は、先日久しぶりにその道を歩いてみたときの体験を次のように語っている。「自分でも驚くくらいどこに何があつたか鮮明に覚えていた。この道の真ん中にはマンホールのふたがあつて、その傍の家の門にライオンの飾りの取っ手がついていたとか、あの角の家では昔コリーを飼っ

ていたとか、この坂の上の家にはどんぐりの木があつて、その傍の細い道を抜けると○○ちゃんの家に出るとか、次から次へと当時の記憶がよみがえっていた。ちょうど夕方、同じ道をかつて私が通っていた幼稚園の子が歩いていっただけであつて、非常に懐かしく、思わず泣きたくなりました。これほど通園路のことを覚えているのだから、幼稚園の中のことはもっと鮮明に覚えているだろうと思いきや、覚えてはいるものの、道路で感じたあの懐かしさはなかった。なぜこんなに道のことを覚えていたのだろうか。思い起こせば、私は幼稚園が嫌いだった。友達と会うのがいやとか、先生が嫌いというのでなく、母親から離れるのが不安だったのだ。私にとって通園路は「行き」に関しては、母親と一緒にいることができる最後の時であつたし、「帰り」はようやく会えた時だったのだ。だからその楽しい時の風景を満喫しようという本能が働いて、今でもはつきり思い出せるような記憶になったように思う」(96年度／人文科学科・1年)。

- 17) 「多分幼稚園に入る前、3～4歳の頃でしょうか。…夕方になると母と一緒に、学校から帰ってくる父を迎えに、トコトコとすすきのはえたような原っぱなどを散歩しに行きました。…風景といえば、その時の、夕焼けで赤くなったすすき、星が見え出して暗くなりだした道路を思い浮かべます。今思い出してみると、懐かしいような悲しいような気分です。あの頃は、自分のことも他人のこともいろいろ考えずに済んだので、とても幸せだったような気がします」(97年度／地理学科・3年)

- 18) 次の3つの例は、その代表的なものである。

「本当は入ってはいけないのに、そうして叱られることを十分に予測しつつも、私たち近所の子供たちは、細長い駐車場の奥にある、JRの線路修理工事の用具置き場に忍び込んだ。…コンクリートの床が広がる。小さな花畑が金網沿いにあり、ダイコンの花や、チューリップや、名もない雑草が、夕暮れの風に細かく揺れ、その草々と同じ涼しく快い風を、やはり私も奥野さんと同じようにさみしい気持ちで受けていた。それらが一番奥にあった。建物と建物の間には、パイプや金属があぶなっかしく積み重なり、その上を忍び足で歩いたり、小さな焼却炉の陰に隠れたり、缶ケリには絶好の場所だった。私は白いズボンをペンキで汚したり、砂利に紛れて転がっている白石化した猫のフンを踏んでしまったりした。

もう少し手前へ来ると、何のためかわからないが、砂利の上に正方形のコンクリートのフロアがあり、四隅に電柱が立っている。腐った巨木がベンチにおあつらえ向きのように転がっている。ここはおままごとの場所だった。赤紫の木の实の汁で指を染め、草の実を服につけ、小さな花を編んだ。夕方の青みの濃い時間、私たちは完全に幸せだった」(97年度／人文科学科・1年)

「(私にとっての原風景は) 自宅の2軒先の空き地で、隅にはグミの木があって、隣の家で飼われている子犬が格子から顔を出している。足元には雑草や秋になるとすすきが生い繁って、バッタを追いかけていた。グミの木に実が熟れると採って食べた。実の色や質感・味は今でも思い出せるほどである。…今はその空き地は駐車場になって、グミの木がなくなり、地面は石が敷きつめられた。そう思ったら、2・3年前には家が建ってしまい、見る影もなくなったという感じである。今は見られなくなった風景だけに、私が自分の『原風景』だと思うのかもしれない」(97年度／人文科学科・1年)

「(私の原風景は) 小学生の頃、よく遊んだ家の側にある、広い広い芝生が生えている所である。私達子供はそこを“しばばたけ”と呼んでいた。本当に広くて、しかも柔らかな芝生で、緑のカーペットみたいで遊びやすかった。持ち主はいたのだが、子供の遊び場になっていることについて文句ひとつ言わなかった。田舎だし、土地も余っていたからだろうと思うが、今思うと、本当に有難いことだった。芝生の隣には、セイトカアワダチソウの生えている草むらがあって、何かわけのわからん資材が置いてある廃屋もあった。芝生では、球技はもちろん、ゴムとびや高跳びやリレーや倒立やら、とにかく何でもできた。廃屋では親に内緒で子ネコや子犬などを育てていた。暗くなるまで、いつもいつも遊んでいた。こんな環境で育ったので、都会の公園を見た時にはとても驚いた。遊具は備えつけてあって楽しそうだけど、すごく狭いし、人工的すぎて開放感が感じられない。遊ぶ時には、いやなことはすべて放っておいて、自由を満喫する開放感を味わうべきなのに…」(96年度／人文科学科・1年)

19) 寺本(1986)は、175人のレポート中、神社の境内で遊んだと述べたものが、34例あったと報告している。

20) 「大好きな神社があった。…私の家はこの(海に

面した) 街で唯一の旅館街の裏手にあった。私の小さな神社は、私の家のさらに裏手にあった。その神社は山を背に建てられていた。右には、あわびやさざえを売っている薄汚れた小さな店、左には、木材やら錆びたストーブのような小ぶりの焼却炉やら、小石の山やら、土管やら、どうでもいいものばかり集めてつくられた空き地、道路をはさんで向い側には、くすんだ白い町役場の建物、何の調和も統制もない、小汚い、典型的な日本の田舎の風景だった。そんな中にその神社は入口をぽっかり開けて、見るからに居心地が悪そうだった。無計画に作られていく悪趣味な周囲の光景とは対照的に、その場所だけは妙に現実感が希薄で、不安定な感じがした。ところが神社の中に一歩踏み込むやいなや、そんな感じは消え去ってしまう。高い木々で天井をふさがれた神社の内部は、薄暗くひんやりとしている。そして空気の質感が周りどちがうのだ。しっとりとしていて重い、何より澄んでいる。さざえやあわびの生臭い匂いも、道路を走る車の排ガスもここには入り込めない。この神社は閉ざされた完全な世界だった。子供のころから人付き合いの下手だった私は、ひまがあるとここに来て、赤いとりでにもたれたり、白い砂利道にしゃがんだりしながら時間をつぶした。別に神様に祈るわけでもなく、ただぼんやりと、どうしてこの街はこんなに汚いのだろうと考えていた。そして、でもここはとてもきれいだ、と」(96年度／人文科学科・1年)

21) 「私にとっての原風景(と思えるもの)は実家のリビングルームです。思い浮かぶのは、大きな掘りごたつがあって、家族がいて、もちろん私もいる風景です。そこで私はご飯を食べ、テレビを見、昼寝をし、勉強もしていました。でも思い出す風景の中で、私たちはご飯も食べていないし、勉強もしていません。ただみんなで和やかにこたつで暖まっているのです」(97年度／人間社会科学科・1年)

22) 「私にとっての原風景とは、自宅の二階の窓から見た風景です。私の実家は山梨の甲府にあります。甲府は盆地ですから、窓から見える風景といえば、山と遠くの町ばかりでした。その風景が私の心に焼きついてならないのです。私の中でその風景はいつも夕方、太陽が沈んだ後の姿です。その時間に見る景色は幻想的で美しいのですが、なぜか不安というか、得体の知れない恐怖のようなものを感じさせました。その時間、景色の中の町は、私の行ったこと

のない知らない町だということを強く感じさせるのです」(97年度／人文科学科・1年)

- 23) 「私にとっての『原風景』とは、母方の祖母の家とその周りの風景かと思う。…中学校にあがころまでは母の実家には少なくとも年一回は訪れていた。都会っ子の私には田舎ののどかさもさることながら、黒くて太い大黒柱や梁のある薄暗くて広い座敷で親戚一同がそろって行なう法事の時の独特の空気は、その後の立派な精進料理のお膳の味とともに印象深いものがあった」(97年度／人文科学科1年)

「(私の原風景は) おばあちゃんの家の中の居間…私はその部屋で過ごす夜が好きだった。いつも遅くまで起きていることは許されなかったけれど、おばあちゃんの家にいる時は遅くまで皆で話したり、テレビを見たりしていた。静かで外では虫が鳴いていて、やっぱり空気が私の家よりまろやかな感じがした。落ち着ける場所だった。何をしても、何をしても許されるようなそんな感じが私の中にはあった」(97年度／人文科学科・1年)。

- 24) 「幼稚園と小学校低学年のころ、週末のたびに母・兄・妹そして私の4人で出かけていた、同じ県内ですが、父が単身赴任していた官舎の一部屋です。お父さんのコロンの匂いで満たされていて、「くさい」と言ってたものの安心できるにおいでした。一週間ぶりに父と会えた喜びや、家族のあたたかさを幼ながらも感じる事ができた場所だったと思います」(97年度／人文科学科・1年)

- 25) たとえば、次のような回答がある。

「はっきりとは覚えていないが、私が4才で幼稚園生の頃、私たち家族4人は父の会社の社宅に住んでいた。木造で青屋根で決していい家とは言えなかった。私と2つ下の妹は、幼児が座る高い椅子に座っている。私達は押し入れを机代わりにして、電話ごっこをしている。オレンジ色のチョッキを着て、赤いスパッツを履いている。まわりの襖は破けており、黄色いカーテンのかかった窓からは夕日の光が差している。後ろで、母が料理をしている音が聞こえ、父は本を読んでいる。こうした記憶の中で、一番頭に残っているのは、黄色いカーテンから漏れる光である。…私の原風景には、父母、妹といった人間の存在、黄色、オレンジ、赤といった視覚的記憶、料理の音といった聴覚的記憶などが入り交ざっているものであった」(96年度／人文科学科・1年)

「私にとっての『原風景』にあたるものは、夏に田

舎へ行くと、必ず祖父母が笑顔で出迎えてくれるという風景だ。大きな家の大きな門から入り、門かくしのそばを通り抜け、足元の砂利の音がカシャカシャとなって、外から応接間の網戸を開けると、NHKの高校野球を見ていた祖父母が藤椅子から立ち上がって両手を広げ、笑顔で迎えてくれるのだ。それから祖母は家のすぐ前に住んでいる祖父の姉を呼んできて、すぐにごちそうの用意をはじめ、祖父は天ぷらとゲームを買いに行く。夜は親戚中が集まり、歓迎会と懐かしい思い出話に花を咲かせるのだ。おじやおばがお酒で顔を赤くしながらにこにこ「大きくなったね」などといって、頭をなでくれる。そして大勢のいとこたちと花火をし、ゲームをしながら夜が更けていく。…年月がたち、祖父母も年老いていき、多くのことが変化しつつあるが、私の田舎に対するイメージは昔のままだ」(96年度／人文科学科・1年)

- 26) 「中学校の教室の一番前の列の窓際から見まわした世界」を原風景とする回答者は、次のように語っている。「先生の視界にちょうど入らない good な席だった。この席にいたのは中1の夏ごろだったが、この席で周りの席の子たちとおしゃべりをして、半年間くらい全く授業を聞かなかったのが印象的」(97年度／人文科学科・1年)

- 27) 「私は…小学校を卒業するまで墨田区に住んでいました。小さい頃からこの工場と商店ばかりの町が嫌いで、農村に強い憧れを持っていました。今でも決してもう一度住みたいとは思いますが、はっと気づくと心が帰っているのは、やはりあの下町の風景です。私の両親は共働きだったので、私は多くの時間を向島にあった祖母の家で過ごしました。夕暮れになると、祖母は家の近くのはとの街という商店街に買い物に出かけ、私はよく一緒についていきました。その頃はまだ豆腐やさんがラッパを鳴らしながら豆腐を売りに来ていて、そのラッパの音が遠くに聞こえました。すでに日が沈んで、通り全体が薄闇に包まれていました。車は通行禁止で、子供を連れたお母さんたちで道があふれています。いつの間にか街灯がともっていて、ほこりをかぶった花の飾りが結びつけてあります。…私にとっては、向島の家も、はとの街も、何かもの淋しい風景でした。父や母が家にいてごはんを作ってくれる日を、いつも心待ちにしていました。夕暮れ時のなぜか淋しくて泣き出したくなるような時間が嫌いでした。今でも、

それがなつかしいとか、あの時に戻りたいとかは一切思いません。ただ、薄暗くて静かな向島の家や、にぎわっていてもどこか淋しいはとの街の風景は、私の原点であったような気がします」(97年度／人文科学科・1年)

28) 「(私の思春期の原風景は)私の地元である静岡駅とその背景に広がる街並の景色である。私は高校卒業後、名古屋で寮生活をしながら浪人していたが、その往復で必ず利用していた新幹線のホームは、決して忘れ得ないものである。出発する時のホームでの気持ち、そしてたまに帰ってくる時に車窓から見えるホームと街並、この時のそれぞれ複雑な気持ちを含め合わせて、今でもその感情とともによみがえってくる」(96年度／教育学科・3年)

29) 「私が中学1年生の時、家庭で問題がおこり、私は母と弟と一緒に別の街へ引っ越した。生まれ育ったところより都会で「N市」という街だった。中2から高1の終わりまでその街で暮らした。思春期という多感な時期であったせいか、もめ事は絶えなかった。私は反抗期を迎え、学校を無断欠席しては、N市を散策した。私が反抗期を終えるとほぼ同時に、弟が半端な登校拒否児になり、学校へ行かなくなった。そうこうするうちに、彼の鬱積は家庭内暴力へ発展した。母と2人裸足のまま逃げ出したことも一度や二度ではなかった。とうとう高一の終わりごろ、もといた街に戻った。父と母と弟はそこで暮らし、私は寮に入った。たった3年足らずの短い期間だったが、N市の街なみや風景は鮮烈に残っている。引っ越した後も、何かの折にN市を訪ねた時、懐かしい風景を見て、私は心臓をつかまれたように切なくなった。それから何度となく訪れたが、切なさは一ひどくなるばかりである。そこに市役所があるという、あたり前のことに涙するのだ。…思うに、風景が自分の心に残るためには、何か思い出が必要だ。密度の濃い時間や経験と絡まって、風景は印象づけられる。だから故郷＝原風景は成り立たない。私にとって故郷はおとぎ話のようなものだ。いい思い出しか見つけることはできない。しかし「N市」はあのころの生々しいどろどろした感情をふっと思ひ出させる。住めるものならもう一度暮らししてみたいという気持ちにさせる。生れ故郷より私の心をつかんで離さない風景である」(97年度／人文科学科・1年)

30) 「東京で生まれ育った私には一般的に故郷といわ

れるような、なつかしい山や川の思い出はありません。そのことに対して残念に思うことが多かったのですが、つい最近になって自分にも原風景があることに気づきました。今年の1月にセンター試験を受験するため上野に行ったのですが、その街並みが私が幼い頃住んでいた街にそっくりだったのです。そこで大変なつかしい思いをしたことを覚えています。特に豆腐屋や呉服屋などの古びた個人商店を見ると、子供の頃の自分が考えていた事を思い出します」(97年度／人文科学科・1年)

31) 「私にとって自分の原風景かと思われるのは、少し前NHKで放送されていた『松が枝町サーガ』というテレビ番組の中に出てくる風景である。時代はまだ日本の家庭にほとんどテレビが普及されていない頃である。よって私が生まれているはずもなく、その頃の事を全く知らないはずであるが、なぜかすごく懐かしい気がする。このテレビ番組に出てくるいくつかの場面を挙げてみると、子供たちがメンコをしたり、空き地で野球をしたり、駄菓子屋でたむろしたりしている。町のある金持ちの家にテレビが来れば忍び込んでみたり、テレビにおじぎして正座して見たりする。月明かりの中、空の弁当箱を腰にぶら下げ、鼻歌を歌いながら酔ったお父さんが帰ってくる。なぜ自分がいた場面でもないのに懐かしいのかよく分からないが、私が子供の頃、テレビゲームで遊んでいたのではなく、田んぼでレンゲをつんだり、タニシをとったりしていて、共通した雰囲気があったのかもしれないことや、母親の子供時代の話をよく聞かされていて、父親が夜に帰ってくる場面などは話とほぼ同じだったり、母の田舎もこのテレビ番組の中の松が枝町と同じ海のそばで、小さい頃よく遊びに行っていたので、風景が重なって見えたのかもしれないと思う」(96年度／人文科学科・1年)

32) 小学校6年から高校1年の途中まで住んでいた六甲アイランドが原風景であるという回答はその数少ない例のひとつである。

「きれいで整備された人工島。道路には車はそんなに通らず、建物や道、噴水、像などがすべて新しくおしゃれ」(97年度／人文科学科・1年)

33) 「私にとって『原風景』と思えるのは…新潟県I市から見える日本海の風景です。I市は自分の生まれた所であり、母の実家がある所でもあります。幼い頃から父の転勤により引っ越しを繰り返し、それ

ぞれの土地にどんなになじんでも、心のどこかに『自分はこの土地の者ではないのだ』という意識がありました。けれども、成長したり生活環境が次々に変わったりしても、I市の風景だけは変わらず、帰省する度に落ち着いた気持ちになりました。そのI市の風景で、行くと最初に目にするのが日本海であり、I市を思い出す時にまず目に浮かぶのも日本海です。…ただその日本海も、I市で見なければ私の『原風景』にはなりません。…やはり、これまで過ごした場所が次々に変わったのとは違い、I市が自分の出生地だというのは不変だという安心感にいた気持ちや親しみがあるからこそ、私は日本海に心安らぐのだと思います」(97年度／人文科学科・1年)

34) 前出 註5)・18) 参照。

35) 前出 註6)・7)・8) 参照。

36) 前出 註3)・17)・22)・27) 参照。

37) 唯一の例外として、次のような記述がある。「私が幼稚園に入る以前のことであるので、私が3・4歳の頃のことで、場所はその当時住んでいたマンションの公園である。公園はかなりの広さがあって遊具もあり、木などもある遊び心地の良い所だった。私は同年代の子よりも少し小さかったので高い所が好きで、うんていの上によくのぼっていた。私が自分の原風景と思うのは、そのうんていの上で、夕方、他の子が皆帰った後、姉2人と私の3人でよく残っていた記憶がある。夕日が沈んですべてのものがオレンジ色になるのをうんていの上からながめていて、風などが吹くと気持ちよくて、ずっと夕日が沈むのを、うんていの上に座って見ていた。やがて母がベランダから顔を出して「帰って来なさい」というのだけれど、私はうんていにのぼれたが、降りることができなくて、ずっとふるえながら、降りられないと泣いていると、たいてい会社から帰宅途中の父がそれを見つけて降ろしてくれたという記憶がある」(96年度／人文科学科・1年)

38) 「近所に友達がいなかったのので、小学校低学年の時の私は、休日になると祖父母が働いている田んぼのとなりの野原で遊んでいました。田んぼに入ると汚れるので手伝いはせず、草花でままごとをしていたような気がします。それで、祖父母は働いているので、結局私は誰にも相手にしてもらえず、近くを通る汽車に向かって手を振っていました。今、その汽車に乗って外を見てみると、昔の私を思い出します」(97年度／人文科学科・1年)

39) 「私は、東京で一人暮らしを始めるまで、自分の生まれた街を故郷＝田舎と感じたことはなかった。小学生の時などは、『田舎のおばあちゃんの家に行きます』という夏休み前のクラスメートの言葉がうらやましくてしかたなく、『どうして私には田舎がないの?』と両親を責めたりした。しかし、今、私の原風景は、私が生まれ育った街の風景である。私の故郷はとつても都会だし、コンクリートばかりだったけど、それでもコンクリートの合間の小さな“どんぐり広場”とか、小学校の校舎とか、全てが私の原風景である。確かに田園風景とか原っぱに言いようもない暖かさとか安心感とかは感じるけど、それでも、そこでは私はやっぱりよそ者で、自分の故郷の風景を基準にその風景を見ているにすぎないのである」(97年度／地理学科・3年)

40) 前出 註23) 参照。

41) 前出 註3)・6)・22)・28)・33) など。

42) 前出 註17)・21)・23)・24)・25) 参照。

43) 前出 註5)・7)・9)・18) 参照。

44) 前出 註16)・27)・37)・38) 参照。

45) 前出 註8)・20)・22) 参照。

46) 前出 註29)。また原風景形成の契機として、次のような思い出を語ってくれた学生もある。

「私が通った小学校の隣にあった杉林。学校の休み時間や放課後は決まってそこにあるブランコやジャングルジムで遊んだ。しかし私がその場所を忘れられないのは、そのためではない。そこはクラスメイトによるいじめの現場であった。私の友人が、杉林のじゃりの上を素足で、手には大きな岩を持たされ、走らされ、うんていにぶら下がらされては体を木の枝でたたかかれていた。その頃の私は怖いもの知らずで彼女を助けたために、その日からというもの、いじめをしていた数人から長年にわたって目のかたきにされてきた。その杉林には、もう今はなくしてしまった私の正義感や勇気が落ちている気がして、卒業してから何度も行って見たが、それも4月駐車場に変わっただけ。私はこれから先、落ち込んだ時どこへ行けばいいのかわからなくなってしまった。嫌な思い出しかないその杉林は、私の一番のよりどころであり、原風景であったと今では思う」(97年度／人文科学科・1年)

47) 前出 註3)・28)・29) 参照。

文献

- 岩田慶治 (1992)『日本人の原風景——自分だけがもっている一枚の風景画——』, 淡交社, 182p 大内俊二 (1989)「中大生に見る日本人の『原風景』」, 中央評論 187, pp.65-68.
- 大内俊二 (1995)「『原風景』調査の結果に見る風土性について」, 日本地理学会予稿集47, pp.258-259.
- 奥野健男 (1989)『増補・文学における原風景——原っぱ・洞窟の幻想——』, 集英社, 302p.
(原版は1972年)
- 勝原文夫 (1979)『農の美学——日本風景論序説——』,

- 論創社, 298p.
- 熊谷主知 (1995)「日本風土論の過去と現在——比較風土学構築のための序説——」, 日本学研究 (北京日本学研究中心), pp.188-208.
- 斎藤次郎 (1983)『放課後の子どもたち』, 岩波書店, 234p.
- オギュスタン・ベルク, 篠田勝英訳 (1988)『風土の日本——自然と文化の通態——』, 筑摩書房, 370p.
- オギュスタン・ベルク, 篠田勝英訳 (1993)『都市のコスモロジー——日・米・欧都市比較——』, 講談社, 236p.